

戦前の奈良県における学校図書館

A Study of the School Library in the Nara Prefecture of before end of the World War II

鞆谷 純一[†]

TOMOTANI Junichi

抄録：戦前学校図書館史の個別研究として、奈良県を取り上げる。特に、木下竹次と仲川明の著述に注目する。戦前の奈良県学校図書館においては、設置方法に集中制と分散制が混在し、あえて独立した図書館を設けず、学級等に本を分散させることがあった。県下の優良学校図書館であっても、予算捻出にはたいへん苦慮しており、図書購入費は不足していた。また、奈良県下の学校図書館の図書購入費は、東京市と大差ない水準にあった。

キーワード：奈良県，学校図書館，児童文庫，木下竹次，仲川明

Keywords : School Library , Nara Prefecture , KINOSITA Takeji , NAKAGAWA Akira

1. はじめに

戦前日本の学校図書館史については、塩見昇『日本学校図書館史』(1986年)¹⁾が基本文献である²⁾。塩見は執筆当時、個別研究がほとんど無い状況で、戦前に重点を置いた学校図書館の通史を描いた。

塩見の著書刊行以後、幾人かの研究者によって、戦前日本の学校図書館に関する論考が発表されている。しかし、戦前史に限ると、同書を上回るような通史的業績は、現時点で出現していない。

例えば、2007(平成19)年3月に受理された博士論文、國枝裕子「近代日本学校図書館史論」(神戸大学大学院総合人間科学研究科)³⁾は、自らの業績を「塩見昇の学校図書館史全体を『書き換える』というよりも、その歴史叙述を『精微にしていく』もしくは『補完していく』という性質を帯

びた研究⁴⁾と述べているとおり、塩見の業績をなぞることで成立している。

塩見や國枝の業績以外にも、戦前学校図書館史の研究は存在する。しかし、その対象は、師範学校附属小学校や私立の成城小学校など、実験校・先端校に集中している⁵⁾。こうした実験校・先端校は、数に限りがある。また、諸研究で取り上げられている、山形市立男子国民小学校は、図書館界の手厚い援助を得た「希有な事例」⁶⁾である。

本稿論者(鞆谷)は、塩見の著書を上回る通史的業績が出現しない理由を、個別研究の乏しさにあると考える。数に限りのある実験校・先端校を追うだけでは、研究は伸び悩みである。対象を広げたり、別の角度から考察したりすることが、学校図書館史研究の発展に必要である。

そこで今研究では、戦前学校図書館史の個別研究として、戦前の奈良県における学校図書館を取り上げる。研究の網を県全体

[†]徳島県立鳴門高等学校

に被せることによって、実験校のみならず、一般的な公立学校の実態も明らかになる。

奈良県を研究対象とした理由は、まず、日本全体を見渡した時、都心でもなく周縁部でもない同県は、サンプル地域として妥当性を有すると判断した。また、太平洋戦争において、空襲の被害を被っていないため、一次史料が現存している可能性が高いと考えた。特に、現在の奈良県立図書情報館（旧奈良県立奈良図書館）は、公文書館の機能を併せ持っている。ただ結果として、同館に学校図書館史に関する公文書は保管されていなかった。そのため、館報や協議会報などを参照した。

戦前の奈良県において、学校図書館に積極的に取り組んだ人物は、木下竹次（奈良女子高等師範学校附属小学校主事：当時）⁷⁾と仲川明（奈良県立奈良図書館司書：当時）⁸⁾である。

本稿は、木下と仲川が著した記事を中心に展開していく。とりわけ、木下による学校図書館の設置方法に関する論説と、仲川による予算確保の問題を論じたものを重点的に取り上げる。

学校図書館の設置方法については、当時は利用の便を考慮して、敢えて独立した「図書室」を設けず、学級等に本を分散させることもあった。つまり、戦前日本では、蔵書を一室に集める「集中制」と、学級等に分散する「分散制」の二つの方法が存在していた（集中式、分散式とも呼ばれたが、本稿では用語を統一した）。この問題は、現在と感覚が異なるがゆえ、注意すべき事柄であろう。

塩見昇は、富山県と大阪市の事例を基に、「公共図書館からの働きかけもみられた先進的な地域で、戦時下の児童文庫（図書室を備えるもの）の設置率は約2割程度ということになるだろうか」⁹⁾と述べている。しかし、特定の学校に「図書室」が無かったか

らと言って、必ずしも学校図書館に冷淡だった訳ではない。敢えて、「分散制」を採っていた可能性があるからである。

戦前の学校図書館の設置方法について、國枝裕子は、博士論文の提出後に発表した論考のなかで、広島高等師範学校附属小学校『学校教育』の記事をもとに、戦前の学校図書館で「本当に望まれたのは、子どものより身近にある教室における素朴な文庫であったのである」¹⁰⁾と述べている。

また、渡邊雄一は、木下竹次主事の奈良女子高等師範学校附属小学校では、『「図書室ノ改善ヲ計リタシ。小学校ハ各教室ニ設備シタシ。」と〔職員会記録に：著者注〕記録されているように、各教室に図書室の機能が持ち込まれていくのである」¹¹⁾と述べる。

こうした設置方法の問題については、塩見の著書では扱われておらず、比較的目的新しい研究課題である。この課題は、特定の雑誌特集や学校以外にも範囲を広げて探究すべきであろう。

また予算確保の問題は、学校図書館を新設するにも、図書を更新するにしても避けて通れない事項にも関わらず、先行研究では扱われていない。日本学校図書館史の大きな空白と言って良いだろう。

本稿論者は、学校図書館の設置方法と予算問題を取り上げることは、新たな学校図書館通史の成立に繋がると考える。本稿は、その一端を担う意図を有している。

なお、戦前の学校図書館は、「児童文庫」や「児童図書館」と呼ばれることが多かった。そのため、今回の研究は、「学校図書館」という名称でなくとも、校内に設けられた「児童文庫」や「児童図書館」を対象にした。ただし、学校附設の図書館であっても、公共図書館としての機能が強いものは、除外した。時代区分は、塩見の著書に倣い「大正期」と「昭和初期」に二分した。また、

校種は小学校に限定した。

2. 大正期：奈良県学校図書館の誕生

2.1 奈良県学校図書館の端緒

日本全体の学校図書館史では、京都市が学校図書館の先進地であり、1902（明治35）年に生祥尋常高等小学校に児童文庫が設置され、学校図書館としてかなりの実態を備えていたと考えられている。以後、京都市内の各小学校では、短期間のうちに文庫が設立されている¹²⁾。

一方、奈良県では、明治期創設の児童図書館の存在は見出せない。奈良県において児童図書館が設けられるのは、大正時代に入ってからである。

奈良県学校図書館の端緒は、1915（大正4）年11月に「今上天皇陛下御即位ノ御大典ヲ記念スル為」設けられた、奈良女子高等師範学校附属小学校の「御即位記念文庫」である¹³⁾。そして、同校の学校図書館を有名たらしめたのは、1919年（大正8）3月、大正自由教育の指導的実践者として名高い、木下竹次が奈良女子高等師範学校教授として、附属小学校主事に補せられてからである。

木下は、附属小学校に着任早々（同年4月8日）の職員会議において、「図書室」を初めとする「設備法の研究」の意見を出し、同月中に「図書室を改善」している。さらに、翌年（1920年）の「新学年経営方針」において、「図書室の利用方法外十数項目」の計画を立てている¹⁴⁾。

木下就任後の変革について、池内房吉（同校訓導）は、「理科室の機械、器具、標本、掛図、準備品の地図、地理歴史の掛図、絵巻類は分散して、学年相応に各教室に移されて、何時でもすぐに使えるようにし、書籍、絵本などは学級本位に買い込まれました¹⁵⁾」と回想している。

木下竹次は、大正自由教育の指導的実践

者として全国に名高い。附属小学校における実践は、「奈良の教育」として注目され、全国の参観者を集めた。しかしながら、同校は、「県下の教育に対する影響はさして強くなり、昭和期にはいり教育の国家統制が強まると、他の新教育運動とおなじように、その力を失った¹⁶⁾」とされている。

なお、木下は県立奈良図書館に対して、「常に館の為に指導を与へ¹⁷⁾」たという。彼の著書、『学校進動論』に含まれる学校図書館論は、『奈良県立奈良図書館月報』1932（昭和7）年1月号の巻頭頁に転載されたこともある。また、県立奈良図書館が刊行した『学校図書館図書目録』（1925年）の序文には、「奈良女高師」などの「諸先生を煩はした¹⁸⁾」ことが記されている。この目録に対する木下の関与は不明であるが、自由教育の風潮のなかで、県下の有力校と県立奈良図書館の間には、交流があったことは確かである。

2.2 木下竹次の学校図書館論

木下竹次は、附属小学校から刊行した雑誌、『学習研究』にて、多くの教育論文を著している。そのなかには、学校の「図書室（館）」を扱ったものがある¹⁹⁾。本節では、木下の学校図書館論について、その設置方法を中心に検討する。なお、先行研究における彼の学校図書館論に関する記述²⁰⁾は、単行本を基にしており、初出が判然としないので、ここで明らかにしておく。

『学習研究』の1923（大正12）年3月号に掲載された「環境の整理」では、「児童生徒が学習する学校では図書室は正課時間にも放課時間にも利用させる。且つ図書室が無くては殆ど学習が出来ないから痛く図書室の必要が感じられる²¹⁾」と、自学自習教育における必要性を述べる。そして、「図書室」の設置については、まず「分散制」（蔵書を各学級等に分散させる方法）を採

るべきで、余裕があれば「中央図書館」を設けるべきだと説く²²⁾。

図書室の設置には分散制と集中制とがある。分散制によると同種の図書を幾室にも備付ける必要があるから稍不経済であるが、平素児童生徒の正課に利用せうとするには如何にしても分散制を執るのが便利である。分散制を取つて各室に図書を備付けるにしても中央図書室を設けて師弟が共用できるようになったら尚便利である。往々教室不足の学校では図書室を設ける余裕が無いことがあるが分散制を取つて教室と図書室とを併合すれば直ちに図書室を設けることが出来る。

木下は、1927（昭和2）年7月号の「将来に於ける学校と図書館」では、「実験室と図書館を併合する方が宜しい」²³⁾と記し、1928（昭和3）年5月号の「学習学校の組織」では、「図書室は各室附設とする」²⁴⁾と述べる。彼は、1931（昭和6）年12月号の「学習生活観に立脚する校地校舎及び設備の改造」でも、学習生活の便から、「分散制」を支持している²⁵⁾。

このように、木下は一貫して、児童文庫は「分散制」を採るべきだと主張している。これは、「能く整理組織された中央図書館が学校にあることは必要であるが経営上其の施設が困難である」²⁶⁾、「図書室は学習室兼用にすれば別に大なる経費を要しない」²⁷⁾という関係も確かにあったが、先述したように各教室に図書を置くことによる学習生活上の利点を鑑みてのことだった。

なお、『学習研究』誌面では、秋田喜三郎（附属小学校訓導）も「環境上より見たる学級図書室」を著し、利用の観点から「各学年の教室を図書室とすることが、最も学習効果のあがるものと信じる」²⁸⁾と述べて

いる。

実は、戦前期において、奈良女子高等師範学校附属小学校で論じられたような、「分散制」の児童図書館経営論は、かなり有力な説であった。

1928（昭和3）年に相次いで刊行された児童図書館の単行本3種のうち、谷口武・浜野重郎『児童図書館の経営方法と優良図書目録』²⁹⁾は、校内に図書館を設ける、いわば「集中制」を採用しているが、小林佐源治『学校学級児童図書館経営』³⁰⁾は、各学級に文庫を作る、つまり「分散制」の観点から児童図書館経営を論じていた。なお、奥野庄太郎『児童文庫の経営と活用』³¹⁾は、その辺を判然としていない。

ちなみに、奈良県立奈良図書館の司書・仲川明は、どちらかと言えば「分散制」を支持し、「理想をいへば両方あることにこしたことはないが、一方だけならば学級文庫にする方が運用に便であり、学習と密接な関係をつけることが出来てよいと思ふ」³²⁾と述べている。仲川明については、後で詳述する。また、これも後に述べるが、奈良県の小学校に誕生する児童文庫も、「集中制」と「分散制」が混在していた。

2.3 大正時代に誕生した各地の学校図書館

奈良女子高等師範学校附属小学校以外にも、奈良県には、大正期の児童文庫開設の記録がある。以下、確認できるものを設立順に箇条書きする。

1919（大正8）年5月、為川尋常小学校（現・田原本町立東小学校）は「児童文庫」（私立）を開設した³³⁾。

1920（大正9）年5月、郡山尋常高等小学校（現・大和郡山市立郡山北小学校・郡山南小学校）は、「児童文庫」（保護者会）を設けた³⁴⁾。

1921（大正10）年4月、奈良県男子師範学校附属小学校では、「自学自習」の教育の流れを受けて、「児童文庫」を設けた。これは、学年ごとの購入で、毎月の児童積立金（5銭～15銭）と保護者会の補助によって運営された³⁵⁾。また同年同月、女子師範学校附属小学校においても、「課外読物の指導に注意して男師附属と同じく児童文庫を開設」³⁶⁾している。

1923（大正12）年6月、高市尋常小学校（現・明日香村立明日香小学校）は「児童文庫」を開設した³⁷⁾。同年9月、二上尋常高等小学校（現・香芝市立二上小学校）でも「児童文庫」を開設した³⁸⁾。

1924（大正13）年5月、三郷尋常高等小学校（現・三郷町立三郷小学校）では、「児童文庫として390冊購入（359円30銭）」³⁹⁾している。

1925（大正14）年1月、北倭第三尋常小学校（現・生駒市立生駒北小学校）は「児童文庫」（保護会）を設けた⁴⁰⁾。

1926（大正15）年10月、東市小学校（現・奈良市立東市小学校）では、「県下読書週間の第1日として児童文庫を開設」⁴¹⁾した。

これらのほかにも、歴史に埋もれた多くの児童文庫の誕生があったものと推察する。

大正期の児童文庫の設立について、1924（大正13）年12月の『奈良県立奈良図書館月報』には、「昨年〔大正12年〕皇太子殿下御成婚の大典を記念する為、各中等学校生徒の自習文庫や、小学校の児童文庫が旭日昇天の勢で設置されたのは、自学主義教育の今日殊に当を得た施設であった」⁴²⁾とある。同年2月号では、中岡清一（同館司書）が、自由教育の流れを受けて、「学校の図書館化」を提唱し、昨今の児童文庫誕生について「輓近教育思想界に於て児童

又は生徒本位の教育説が高唱され、自学主義が称同されるゝ結果として、かゝる施設が重要視されるゝ至つた事は云ふ迄もない」⁴³⁾と述べている。このように、大正自由教育の風潮のなかで、公共図書館側でも児童文庫（学校図書館）への期待が高まっていた。

2.4 仲川明の「学校図書館建設運動」

奈良県立奈良図書館のなかで、特に学校図書館に関心を寄せたのは、同館司書（後に館長）の仲川明であった。仲川は、1918（大正7）年に奈良県師範学校第一部（現・奈良教育大学）を卒業した後、東市小学校（現・奈良市立東市小学校）の訓導になり、1925（大正14）年3月に県立奈良図書館に転じた人物である⁴⁴⁾。館長は兼任が多く⁴⁵⁾、業務は仲川に負うところが大きかった⁴⁶⁾。戦後は、在職1年であるが、奈良県教育委員会の学校図書館担当の指導主事になる人物でもある⁴⁷⁾。

仲川明は、県立奈良図書館司書に就任した年の『奈良県立奈良図書館月報』1925（大正14）年7月号に「一村一館」と題する巻頭記事を著し、「先ず小学校、補習学校の生徒の為に学校図書館の設立、充実を望む」⁴⁸⁾と訴える。更に、同月報の1925（大正14）年10月号では、「学校図書館建設運動」⁴⁹⁾を発表する。同稿では、学校には多くの本が必要であり、教師が率先して読書することで、校内に読書の雰囲気を作るべきだと主張する。

本のない学校は
御神体のない神殿のやうに
魂がぬけてゐる
数万円の校舍よりも
なぜ数千円の書籍を選ばない

講堂 ピアノ 器機 器具

それはすべて必要である
しかし願くば 更に
広い運動場と
裕かな学校園と
そうして完備した図書館とを
彼等自由の子に与へよ

教師 先づ本を読み
そうして学校に読書の雰囲気を作れ
教師も読む
生徒も読む
それが生きてゐる相だ
汝 読まずんば死せよ

さらに、『奈良県立奈良図書館月報』の翌月号(11月)では、「金は生まれる」⁵⁰⁾と題する一文を著し、図書館予算の確保のためには、職員や保護者から積極的に寄附を募ることを提案し、図書館を欲しいと要望があれば、「金は生まれる」と説いた。

私はいつも学校の図書館を先に言ふ。学校には今直ちに教育の主体たる先生が居られるから図書館事業が容易に行なはれるからである。それで学校ならば、市町村の予算に要求するのが正道である。毎年の図書購入費は百円以上四五百円、創設する所は三四年の継続事業でもよいから数百円宛要求してほしい。但しこれが出来なければ第二の途を執らねばならぬ。それについて私の試案を述べたい。

先ず職員全部が一ヶ月の俸給の半ばを割いて寄附することである。

次に保護者会を開いて相談することである。先生も話をする。地方の理解者からも話をしてもらふ。特に先生に読書研究をしてもらふ事が児童教育の上

に多大な利益を得る所以を説いてもらふ。それから児童に話させる事は案外に応え方がひどいもので、児童が哀れから書籍を要求する叫びをなしたならば保護者は泣いて金を出すことは請合である。

(中略)

要するに金がないのではなくて、要求がないのではないか。真に図書館を持たねばならぬといふ要求、渴求があれば金は生れるものである。

また彼は、学校図書館を市町村の公共図書館設置の第一歩と位置づけた。1926(大正15)年2月号の巻頭記事「学校図書館を要望す 学校図書館と学校公開図書館」⁵¹⁾では、下記のように論じ、予算獲得の必要性も強調している。

米国では、学校と図書館を教育の二大施設といつてゐるが、今日の我国ではかういふ理想はまだまだ〔原文はくの字点〕遠い。だからどうしても地方の学校に図書館を附設することが緊急の課題である。先づ教師及び生徒用の学校図書館を拡充させ、出来れば一日も早くこれを学校公開図書館にされたいものである。

(中略)

又しても金の問題に頓着するが、時正に小学校の予算編成期である。自己の教育思想の為に出来るだけ金を出さしめる事は校長の責務であらねばならぬ。

教育家や宗教家は金をもうける方法を持たないのである〔。〕だから自己の理想を実現するに金を要すれば、その金を他から得る方法を考へるに何の躊躇があらうか。

なお、奈良県立奈良図書館は、1925（大正14）年11月に『学校図書館図書目録』⁵²⁾を「印刷を急ぎ」⁵³⁾刊行している。当時、この種の目録が必要とされていたことが伺える。同目録は、「児童用図書」と「教師、学生用図書」の二部構成である。

目録序文には、「学校に図書館の必要な事は誰しも痛感してゐながら、さて之を創設しやうとして行悩む第一の難関は金がないといふ事である。そして第二に来る難関は僅かなる金で先ず何を買ふべきかといふ事である。この第二の難関を開く為の一助にとも思つて之を作ることにした」とあり、「数千円の金で学校図書館は完備する」⁵⁴⁾とも記されている。ここでも費用の問題が述べられている。

ちなみに、同目録の発行人は、「中川明」と記されているが、これは「仲川明」の誤記であろう。仲川はその後も館報に、「学校図書館と経費の捻出」⁵⁵⁾（1928年12月）を著している。当時、学校図書館を設置する際の隘路は、予算問題だったのである。

3. 昭和初期：予算捻出に悩む学校図書館

3.1 昭和初期の有力な学校図書館

奈良県立奈良図書館の仲川明は、1927（昭和2）年より、館報に、「町村図書館巡り」を不定期連載している。連載のなかには、小学校の児童文庫も含まれており、昭和初期の奈良県における学校図書館事情を伝える貴重な記録である。

仲川によれば、県下で「児童文庫としてかなりの設備を有し、よく運用されてゐる」⁵⁶⁾のは、新庄町立新庄尋常高等小学校（現在の葛城市立新庄小学校）の児童文庫であった。

そもそも、新庄小学校の児童文庫は、時の校長によって、1923（大正12）年12月、皇太子殿下御成婚記念・町制実施記念とし

て計画が立てられ、地域の寄付金による881冊の図書をもって、1925（大正14）年6月5日に開開始した。寄付金の総額は3,005円。校長と町の収入役が各家庭を訪問して集めたという。そのうち、1,005円で図書や書架などを購入し、残りの2,000円は基金として積み立てた。

仲川が視察した、1927（昭和2）年7月当時の蔵書冊数は1,288冊。図書は職員室南側の一室、二つの戸棚に納められていた。つまり、「集中制」である。これは、校内で「可なり議論があつた」末、採った方法であつた。このことについて、仲川は「各学校に学級文庫があり中央にも又学校文庫があれば理想だが、少ししかの蔵書の場合は同校のやうな仕方も止むを得ない一つの方法であると思ふ」と述べている。

新庄小学校の児童文庫は、基本的には閉架式であり、児童は学級備え付けの目録を見て用紙に記入し、教師を通じて貸出しを行っていた。毎日30～40冊の貸出しがあつたという。

新庄小学校の児童文庫は、仲川から見ると予算的な問題があつた。同校の図書購入費は毎年、基金（2,000円）の利息150円その他により、200円以上を確保していた。しかし彼曰く、「児童が飛びつく様な新刊書の少ないのは稍淋しさを感じた。この二倍位の図書費があつて、もつと図書を買ふことが出来たら、と一寸そんなことを思つた」。しかし一方で、「同校の児童文庫は少なくとも県下有数のものである」とも述べている。当時の予算水準の低さが伺える。

仲川は、新庄小学校の実態を踏まえて、県下の小学校に向けて、児童のための図書を豊富に整備するよう訴えている。

現在の小学校には実以て児童の図書がなさすぎると思ふ。無論学校にはいろいろの備品や消耗品はいるだろうが、

児童の図書は最も必要なる部分を占めてみると考へて良い。(中略)少々乱暴な考へだが私は私はよし校舎がぼろくても児童を豊富な図書の内にあつて勉強させてやりたい。(中略)理想はまだまだ遠い。

予算不足は、各校共通の問題であった。仲川が別途視察した、山辺郡浅和村の朝和尋常高等小学校と長柄尋常高等小学校(共に現在の天理市立朝和小学校)の児童文庫も、「両校とも蔵書はよく利用されてゐる方」であるが、彼は「毎年の経費は少ない様に思ふ」⁵⁷⁾と感想を述べている。

3.2 県下小学校に於ける児童文庫の調査

奈良県立奈良図書館は、1934(昭和9)年3月、「県下小学校に於ける児童文庫の調査」⁵⁸⁾を行っている。この調査の目的は、「県下小学校に於ける児童文庫の普及発達を奨励する準備工作として」なされた。それによると、児童文庫を設置している小学校は、県下319校中、208校(約3分の2)に達していた。大正末期以後の学校図書館の広まりが伺える。

児童文庫を設けている208校のうち、蔵書と予算が「一定規模以上」の学校は、末尾に掲載した表の45校(集中制24校、分散制21校)であった。45校の平均蔵書冊数は、1,241冊。年間図書購入費の平均は、121円である。これは必要を満たしていたのだろうか。

実は戦前にあつて、学校図書館にどれだけの図書が必要で、そのための図書購入費の金額を、蔵書更新まで含めて論じた者は少ない。

1928(昭和3)年に相次いで刊行された学校図書館の参考書のうち、谷口武・浜野重郎『児童図書館の経営方法と優良図書目録』は、「五十円を以て経営する場合」、「百

円を以て経営する場合」、「百円以上の場合」を想定している⁵⁹⁾。ただ、これは創設時に購入する図書の予算であり、維持に必要な予算を示したものではない。奥野庄太郎『児童文庫の経営と活用』もほぼ同様で、創設時に「経費僅少の場合」(5~10円)、「経費三十円の場合」、「経費五十円の場合」、「経費百円の場合」、「経費百円以上千円を超過する場合」を想定しているが、本の更新には触れていない⁶⁰⁾。

唯一、小林佐源治『学級学校児童図書館経営』は、「分散制」の学校図書館経営の観点から、蔵書更新を考慮して、必要経費を論じている。小林は、どの生徒にも毎週1冊読ませることを想定して、一学級の「学級図書館」につき、図書40~50冊、新聞1~2種、雑誌2~3種を欲している。彼は、本の寿命を2、3年と考え、それを維持するには、一か月に4、5円かかると見積もった⁶¹⁾。これを一年間に直すと、一学級の「学級図書館」に必要な維持費は、48~60円になる。しかし、奈良県の蔵書と予算が「一定規模以上」の学校全体の図書費は、年平均121円である。当時の学校図書館が、少ない予算で悪戦苦闘している様子を感じる。

奈良県の事情は例外でない。県立奈良図書館による調査の2年前、すなわち1932(昭和7)年、東京市役所は「市立小学校児童文庫ニ関スル調」⁶²⁾を実施している。この調査によると、東京市立小学校で児童文庫を設置している154校の平均蔵書冊数は、798冊。年間図書購入費の平均は、71円であった。これは奈良県の「一定規模以上」の学校を下回る。たとえ経済的に恵まれた東京市であっても、児童文庫の予算は、乏しかったのである。

3.3 「紀元二千六百年」の学校図書館新設

日本政府は、神武天皇即位から数えて二

千六百年年になる 1940 (昭和 15) 年を「紀元二千六百年」として盛大な祝典を催した。この年は官民を挙げて、数々の記念行事が実施された。奈良県は、神武天皇を祀る橿原神宮の「聖地」として重視され、奉祝行事の中心地となった。奈良県学務課は、「紀元二千六百年記念図書館建設運動」を実施し、図書館未設置の市町村に対して、図書館新設を奨励する⁶³⁾。また、奈良県図書館協会は、「紀元二千六百年県民読書運動」⁶⁴⁾を展開する。そして、この国家的慶事はまた、学校図書館新設の契機になった。

奈良第五尋常高等小学校 (現・奈良市立佐保小学校) は、奉祝事業として、「児童図書室」を新設し、1940 (昭和 15) 年 9 月 24 日に開館している⁶⁵⁾。その背景には、「読書に飢ゑつゝある児童の千四百名、この貧富それぞれ [原文はくの字点] の児童に、伸びやかな豊かな教養を与からしめたいとの念願」があった。

同校の「児童図書室」の新設には、校内で選出された校長以下 6 名の委員が担当し、「先ず良書の選定が第一と考へ」、文部省推薦図書を中核として、各地の図書館報や単行本を参照し、『児童良書五百選』を編集、印刷する。同校の蔵書は、量より質を重視し、「冊数の多いことより、その少ないことを誇」っていた。

費用は、6 名の委員が、「余暇の夜分を充てゝ訪問力説し」、1,000 余円の寄付を集めた。その苦労は、「寄附勧誘の悩み、辛さはその当事者のみ知る事柄であらう」と言われている。当初は、小学校後援会から捻出した 300 円の予算で賄う予定であったが、書棚等雑費を除くと 100 冊余りの図書しか購入できないので寄付を募ることになった。

こうして完成した「児童図書室」は、書棚 2 本と 70 人分の古机、新着図書の掲示板や、大黒板 3 面を備えていたという。つまり同校は、「集中制」を採用したのである。

図書室の係員は、上級生の児童が輪番で担当し、監督先生は 6 名の委員が交代で行った。なお、奈良第五尋常高等小学校の「児童図書室」に対して、県立奈良図書館の仲川明は、「良書選定」や「其後の経営」を支援したとされる。

県立奈良図書館は、1941 (昭和 16) 年 6 月 20 日、「国民学校と図書館の連絡会」を開き、学校側から 30 名の出席を見ている。そこでは、第五尋常高等小学校 (佐保国民学校) の参加者から、「千円あまりの金でこれだけの効果の上るものは体操機具等の比でない」、「毎月の発表会には先生に文庫の図書を読んでその話をしてもらふ様にしている」との発表があった。

この会では、生駒国民学校 (生駒尋常高等小学校、現・生駒市立生駒小学校) の参加者からも、奉祝事業として、寄付金 2,863 円を集め、児童文庫を作ったという報告がなされている。同校の文庫は、3 年以下は「低学年文庫」を作り共同利用、4 年以上は各学級に文庫を設置した。また職員室には「基本文庫」を設け、辞書、叢書、教師用図書を備え付けた⁶⁶⁾。つまり、「分散制」の学校図書館である。1944 (昭和 19) 年 1 月には、奈良県図書館協会の総会参加者が同校の文庫を視察している⁶⁷⁾。

4. まとめ

奈良県の学校図書館は、大正時代の奈良女高師附属小学校の「御即位記念文庫」に端を発し、その他の学校に設置された児童文庫が続いた。この背景には、大正自由教育の風潮があった。

戦前の同県で、学校図書館に積極的に取り組んだ人物に、木下竹次 (奈良女子高等師範学校附属小学校主事) と仲川明 (奈良県立奈良図書館司書) がいた。木下は『学習研究』、仲川は『奈良県立奈良図書館月報』

の誌面にて、自身の学校図書館論を執筆している。

木下竹次は、学校の環境整備の一環として、「図書室」の設置を唱えた。仲川明も、「学校図書館建設運動」を提唱すると共に、予算確保の方策にまで踏み込んだ記事を執筆した。当時の学校図書館の最大の隘路は、予算問題であった。

戦前の有力な学校図書館は、新庄小学校の児童文庫であった。その経費は、校長と町の収入役が各家庭を訪問して集めたものだった。その苦労たるや察するに余る。しかし、同校の図書費は、仲川をして「もつと図書を買ふことが出来たら」と嘆かせる程乏しいものだった。戦前の学校図書館の貧弱さが伺える。予算不足は、奈良県特有の問題ではなかった。奈良県と東京市の実態調査を比較しても、決して都市部が恵まれていたのではないことが分かる。よって、奈良県の史実は、戦前の学校図書館の実態として、一般化できよう。

なお、当時の学校図書館の設置方法は、「集中制」と「分散制」の二つの考え方があった。木下は、利用の便を考慮して「分散制」を支持している。戦前は、独立した「図書室」が必ずしも是とされていた訳ではない。奈良県の学校図書館は、「集中制」と「分散制」がほぼ拮抗していた。これは戦前と現代の学校図書館観の相違であり、独立した「図書室」を設けていない学校に対して、直ちに悪条件であったと決めつけることは出来ない。事実、1,000余円を集めた奈良第五尋常小学校では、「集中制」を採り、2,863円を集めた生駒国民学校では、「分散制」を採用している。学校図書館充実の是非は、独立した「図書室」の有無よりも、図書費の額を見た方が良からう。図書費の多寡については、県下の有力校でさえ、不足した額であったことを本研究にて立証した。これこそが、戦前学校図書館の

水準を表す格好のデータと言える。

予算問題と設置方法に関しては、先行研究では論点になっていなかった。本論文で初めて焦点を当てた事柄であり、戦前の学校図書館実態について、新たな視点を提供することができた。こうした視点を変えた研究の蓄積こそが、日本の学校図書館史研究を豊かにし、新たな通史編纂に結びついていくと考える。

注

- 1) 塩見昇『日本学校図書館史』全国学校図書館協議会、1986、211p. (図書館学大系5) なお、塩見の著書とほぼ同時に、清水正男「わが国における学校図書館発展の研究」ほおずき書籍、1986、431,115p.も刊行されている。
- 2) 『日本学校図書館史』について、三浦太郎（東京大学助教：当時）は、「学校図書館でのその後の基本文献とされるような著作」と評している。「エビデンスベーストアプローチによる図書館情報学研究の確立 第5回ワークショップ『図書館史研究にとってエビデンスとは何か?』」（2007年7月28日 於慶應義塾大学三田キャンパス）
<http://www.flet.keio.ac.jp/~ueda/eba/5/event070728_5.html>.[引用日:2013-9-15]
- 3) 国枝裕子「近代日本学校図書館史論」〔国枝裕子〕、2007、215p. (国立国会図書館関西館所蔵博士論文)

なお、国枝の学校図書館史に関する業績に次の様なものがある。「山松鶴吉の学校図書館論」『教育科学論集』8、2004、p.7-16。「今澤慈海の学校図書館論」『神戸大学発達科学部研究紀要』14(1)、2006、p.35-44。「日本に影響を与えた20世紀初頭のアメリカ学校図書館情報」『アメリカ教育学会紀要』17、2006、p.44-53。「成城小学校におけるカリキュラム改革再考 学習環境としての学校図書館論とその実践を中心に」『カリキュラム研究』16、2007、p.1-13。「戦前日本の教育ジャーナリズムに見る学校図書館の研究」〔含 教育関係

雑誌上の学校図書館関連記事の傾向、『教育研究』における学校図書館関連記事一覧』『神戸大学発達科学部研究紀要』14(2),2007,p.295-304.

「昭和大礼前後の学校図書館状況 「学校図書館経営号」(広島高等師範学校附属小学校『学校教育』第185号)の内容に注目して」『研究論叢』15,2008,p.1-14.「間宮不二雄の学校図書館論 山形市男子国民学校の学校図書館実践に注目して」『南九州大学人間発達研究』1,2011.3,p.13-24.

- 4) 前掲3) 國枝「近代日本学校図書館史論」p.208.
5) 前掲3) の國枝裕子の業績に加えて、次のような論考が存在する。

木村稔「児童文庫の誕生」渡辺信一先生古稀記念論文集編集委員会編『生涯学習時代における学校図書館パワー』渡辺信一先生古稀記念論文集刊行会,2005.,p.299-313.

山田泰嗣・渡邊雄一「成城小学校における読書時間の特設と児童図書館について」『教育学部論集』17,2006,p.99-114.

山田泰嗣・渡邊雄一「沢柳政太郎と図書館教育」『教育学部論集』18,2007, p.91-105.

渡邊雄一「仏教者の図書館観について 沢柳政太郎と成城小学校における図書館教育を中心に」『日本仏教教育学研究』15,2007,p.131-137.

渡邊雄一「木下竹次の『学習法』における環境整理と学校図書館について」『日本教育学会大会研究発表要項』67,2008,p.72-73.

渡邊雄一「児童文庫の設立とその背景について 明治期における京都市小学校の事例から」『佛教大学教育学部学会紀要』7,2008,p.161-172.

そのほか、植民地満洲の学校図書館を取り上げた、小黒浩司「満鉄児童読物研究会の活動 満鉄学校図書館史の一断面」『図書館界』57(1),2005.5,p.2-12.旧制女学校を対象にした、拙稿「三好高等女学校『婦人図書館』 学校図書館の先覚者・高津半造」『図書館文化史研究』23,2006,p.53-85.がある。

- 6) 前掲1), 塩見『日本学校図書館史』p.19.

- 7) 木下竹次は、1872(明治5)年3月25日福井

県生まれ。1893(明治26)年3月福井県尋常師範学校卒業。1898(明治31)年3月東京高等師範学校文科卒業、同年4月奈良県尋常師範学校教諭兼附属小学校主事。1900(明治33)年1月富山県尋常師範学校教諭兼舎監、同年4月同校附属小学校主事。1904(明治37)年3月鹿児島県師範学校教諭。1910(明治43)年4月鹿児島県女子師範学校校長、同年5月鹿児島県立第二高等女学校校長。1917(大正6)年7月京都女子師範学校校長。1918(大正7)年5月京都府立桃山高等女学校校長。1919(大正8)年3月奈良女子高等師範学校教授、同校附属実科高等女学校主事、同校附属小学校主事。1940(昭和15)年12月退職。1946(昭和21)年2月14日逝去。「木下竹次略年譜」木下亀城・小原國芳編『新教育の探究者 木下竹次』玉川大学出版,1972,p.276-278.

- 8) 仲川明は、1899(明治32)年1月5日大阪市生まれ。1911(明治44)年祝徳尋常小学校卒業。1914(大正3)年山辺高等小学校3年卒業。1918(大正7)年奈良師範学校第一部卒業、同年東市小学校訓導。1921(大正10)年3月奈良県立奈良図書館司書、1945(昭和20)年4月22日同館長事務取扱、1950(昭和25)年9月30日同館長。1952(昭和27)年奈良県教育委員会指導主事、1953(昭和28)年退職。1971(昭和46)年6月22日逝去。『現代人物誌』東亜出版協会,1953,p.21.『奈良県紳士録』大和タイムス社,1961,p.317. 瀬川敏夫「十人の功績をしのぶ」『五十年史』奈良県童話連盟,1975,p.222.『奈良県立奈良図書館小史』奈良県立奈良図書館,1977,p.31.乾健治『郷土歴史人物事典 奈良』第一法規出版,1981,p.182.「温故知新 県立図書館100周年に向けて 図書館をめぐる人々(1)」『奈良県立奈良図書館報 うんてい』74,2003.3,p.2-3.

なお、仲川の活動は広範囲であった。奈良県童話連盟(1926年発足)の「生みの親」であり、その機関誌『童心』、『大和童話』の編集に深く関わった。1930(昭和5)年から売太神社の阿礼祭を続け、奈良県郷土会誕生(1934年)の主唱

者のひとりでもあった。

仲川明の評伝的研究として、小林恵美「奈良県児童文化研究 奈良県童話連盟における仲川明の役割」『国語教育学研究誌』20,1999.3,p.256-268.がある。なお、同稿には仲川の執筆記事一覧が纏められているが、戦前の『奈良県図書館協会報』と『奈良県教育』に著した記事が欠落している。ちなみに、『奈良県図書館協会報』は、奈良県立図書情報館での所蔵が確認できず、大阪府立中央図書館所蔵のものを参照した(府立中央図書館所蔵の『奈良県立奈良図書館月報』と一緒に綴じられている)。

- 9) 前掲 1), 塩見『日本学校図書館史』 p.134.
- 10) 前掲 3), 國枝「昭和大礼前後の学校図書館状況」 p.7.
- 11) 前掲 5), 渡邊「木下竹次の『学習法』における環境整理と学校図書館について」 p.73.
- 12) 前掲 1), 塩見『日本学校図書館史』. 前掲 5), 木村「児童文庫の誕生」. 前掲 5), 渡邊「児童文庫の設立とその背景について」.
- 13) 『奈良女子高等師範学校附属小学校一覧』: 大正 6 年, 奈良女子高等師範学校附属小学校, 1917, p.196-200.
- 14) 創立八十周年記念誌編集係編『わが校八十年の歩み』奈良女子大学文学部附属小学校創立八十周年記念事業実行委員会, 1991, p.327. 長岡文雄『学習法の源流 木下竹次の学校経営』黎明書房, 1984, p.37-45. (黎明選書 24)
- 15) 池内房吉「木下先生と『奈良の学習』」前掲 7), 木下亀城・小原國芳『新教育の探究者 木下竹次』 p.227.
- 16) 鈴木良編『奈良県の百年』山川出版社, 1985, p.170. (県民百年史 29)
- 17) 堀内竹蔵「御挨拶」『奈良県立奈良図書館月報』13(7), 1932.7, p.1.
- 18) 奈良県立奈良図書館編『学校図書館図書目録』木原文進堂, 1925, 序 p.3.
- 19) 木下竹次の著書にある「図書室(館)」の記述は次の通り。『学習原論』目黒書店, 1923, p.208-213. 『学習各論』下巻: 目黒書店, 1929, p.206. 『学校進動論』上巻: 明治図書, 1932, p.353-356. 『学校進動論』下巻: 明治図書, 1934, p.659-663.
- 20) 前掲 5), 渡邊「木下竹次の『学習法』における環境整理と学校図書館について」.
- 21) 木下竹次「学習原論(一二) 環境の整理」『学習研究』2(3), 1923.3, p.55.
- 22) 同上, p.56.
- 23) 木下竹次「将来に於ける学校と図書館」『学習研究』6(7), 1927.7, p.6.
- 24) 木下竹次「学習学校の組織(二)」『学習研究』7(5), 1928.5, p.206.
- 25) 木下竹次「学習生活観に立脚する校地校舎及び設備の改造(四)」『学習研究』10(12), 1937.12, p.18.
- 26) 前掲 23), 木下「将来に於ける学校と図書館」 p.5.
- 27) 木下竹次「読書力の涵養(一)」『学習研究』8(2), 1929.2, p.25.
- 28) 秋田喜三郎「環境上より見たる学級図書室」『学習研究』3(11), 1924.11, p.54.
- 29) 谷口武・浜野重郎『児童図書館の経営方法と優良図書目録』第一出版協会, 1928, 162p.
- 30) 小林佐源治『学校学級児童図書館経営』目黒書店, 1928, 417p.
- 31) 奥野庄太郎『児童文庫の経営と活用』明治図書, 1928, 326p.
- 32) 仲川〔仲川明〕「町村図書館巡り(五) 奈男師附小児童文庫」『奈良県立奈良図書館月報』8(11), 1927.11, p.1.
- 33) 「奈良県公私立図書館調査」『奈良県立奈良図書館月報』4(7), 1925.7, p.4-5.
- 34) 同上, 「奈良県公私立図書館調査」 p.4.
- 35) 奈良教育大学創立百周年記念会百年史部編『奈良教育大学史百年の歩み』奈良教育大学創立百周年記念会, 1990, p.280.
- 36) 同上, p.287.
- 37) 坂本良夫編『高市のあゆみ』高市小学校史編集委員会, 1981, p.41.
- 38) 香芝町立二上小学校創立百周年記念事業実行

- 委員会編『二上小学校創立百周年記念誌』二上小学校, [刊行年不詳], p.31.
- 39) 記念誌編集委員会編『三郷小学校百周年記念誌』三郷小学校百周年記念事業推進委員会, 1974, p.24.
- 40) 前掲 33), 「奈良県公私立図書館調査」 p.4.
- 41) 奈良市立東市小学校創立百年記念事業実行委員会編『東市小学校百周年記念誌』奈良市立東市小学校創立百年記念事業実行委員会, 1976, p.37.
- 42) 「県下図書館週間瞥見」『奈良県立奈良図書館月報』2(12), 1924.12, p.1-2.同様の内容が, 「奈良県に於ける図書館週間」『図書館雑誌』67, 1925.6, p.10-11.にも掲載されている。
- 43) 中岡司書 [中岡清一] 「学校の図書館化」『奈良県立奈良図書館月報』2(2), 1924.2, p.1-2.誌面には, 3巻2号と記載されているが, 明らかに2巻2号の誤りである。
- 44) 仲川明の履歴については, 注8を参照されたい。
- 45) 『奈良県立奈良図書館小史』奈良県立奈良図書館, 1977, p.31.
- 46) 有山崧 (文部省嘱託: 当時) は, 1940 (昭和15) 年2月, 奈良県の図書館状況を調査し, 「一般的にみて, 図書館活動はそう盛んな所とは云へないと思ふ」と述べている。県立奈良図書館に至っては, 「設備等は日本歴史創業の地の中央図書館としては聊か貧弱である」と酷評している。しかし一方で, 有山は, 「幸に仲川司書を始めとして時期を担ふに人を得てゐる」と評価していた。有山崧「奈良県図書館状況視察記」『図書館雑誌』34(3), 1940.3, p.79-80.有山崧「続奈良県図書館状況視察記」『図書館雑誌』34(7), 1940.7, p.247-251.
- 47) 「学校図書館の動き」『奈良県図書館協会報』1, 1953.10, p.20-21.仲川明「学校図書館と市町村図書館の将来」『奈良県図書館協会報』1, 1953.10, p.22.
- 48) 仲川明「一村一館」『奈良県立奈良図書館月報』4(7), 1925.7, p.1.
- 49) 仲川明「学校図書館建設運動」『奈良県立奈良図書館月報』4(10), 1925.10, p.1.
- 50) 仲川明「金は生まれる」『奈良県立奈良図書館月報』4(11), 1925.11, p.1.
- 51) 仲川明「学校図書館を要望す 学校図書館と学校公開図書館」『奈良県立奈良図書館月報』7(2), 1926.2, p.1.
- 52) 前掲 18), 『学校図書館図書目録』.
- 53) 前掲 18), 『学校図書館図書目録』の「おことわり」の頁。
- 54) 前掲 18), 『学校図書館図書目録』序 p.1-2.
- 55) 仲川明「学校図書館と経費の捻出」『奈良県立奈良図書館月報』9(12), 1928.12, p.1.
- 56) 仲川 [仲川明] 「町村図書館巡り (三) 新庄小学校児童文庫」『奈良県立奈良図書館月報』8(8), 1927.8, p.1-2.以下の新庄尋常高等小学校に関する記述は, この文献による。
- 57) 仲川 [仲川明] 「町村図書館巡り (六) 朝和村二校の図書縦覧所と児童文庫」『奈良県立奈良図書館月報』8(12), 1927.12, p.1.
- 58) 「県下小学校に於ける児童文庫の調査」『奈良県立奈良図書館月報』15(5), 1934.5, p.1.
- 59) 前掲 29), 谷口武・浜野『児童図書館の経営方法と優良図書目録』 p.111-112.
- 60) 前掲 31), 奥野『児童文庫の経営と活用』 p.66-86.
- 61) 前掲 30), 小林『学校学級児童図書館経営』 p.179-180.
- 62) 東京市編『市立小学校児童文庫ニ関スル調』: 昭和7年5月末現在, 東京市, 1932, 24p.
- 63) 「紀元二千六百年記念図書館建設運動」『奈良県図書館協会報』5(1), 1940.1, p.1.
- 64) 「紀元二千六百年県民読書運動」『奈良県図書館協会報』5(1), 1940.1, p.1.
- 65) 森川辰蔵「紀元二千六百年記念児童図書室の新設」『奈良県図書館協会報』6(2), 1941.2, p.1-2.以下, 奈良第五尋常高等小学校に関する記述は, この文献による。
- 66) 「国民学校の児童文庫」『奈良県図書館協会報』6(7), 1941.7, p.1-2.
- 67) 「奈良県図書館協会昭和一一八年度総会」『奈良県教育』417, 1944.2, p.38-39.

表：県下小学校に於ける児童文庫の調査

蔵書 1,000 冊以上, 昭和8年度図書購入費 100 円以上		
学校名	蔵書冊数	購入費(円)
女高師附属小学校	1,166	162
男師附属小学校	1,500	367
女師附属小学校	2,000	400
奈良第一小学校	1,336	100
奈良第二小学校	1,200	200
治道小学校	1,118	164
郡山小学校	4,942	400
富雄南小学校	1,139	160
都跡小学校	1,556	155
天理小学校	1,525	250
柳本小学校	1,249	175
安倍小学校	1,500	207
桜井小学校	1,600	175
松山小学校	2,162	140
晩成小学校	2,000	100
高田男子小学校	1,000	200
箸尾小学校	2,407	174
五條男子小学校	1,700	300

蔵書 500 冊以上, 昭和8年度図書購入費 50 円以上(これに準ずる学校)		
学校名	蔵書冊数	購入費(円)
奈良第三小学校	844	50
奈良第五小学校	500	100
帯解小学校	850	50
筒井小学校	825	100
平城小学校*	700	30
南生駒小学校*	865	30
安堵小学校*	2,130	
丹波市小学校	845	150
豊井小学校	1,200	70
長柄小学校	683	60
春日小学校*	1,071	10
都小学校	800	100
平野小学校	580	100

千代小学校	700	50
三輪小学校 *	1,175	30
宇賀志小学校	800	130
榛原第一小学校	913	51
曾爾小学校	1,574	80
眞管小学校	1,158	28
鵬公小学校	533	65
新庄小学校	682	80
戸毛小学校	504	50
葛城小学校	1,886	20
五條女子小学校	529	55
宇智小学校	600	100
下市小学校 *	844	
下北田第一小学校	934	30

注)「県下小学校に於ける児童文庫の調査」『奈良県立奈良図書館月報』15
(5),1934.5,p.1をもとに作成。学校名及び空白の部分は、資料記載どおり。
*印は、町村図書館の一部。